中間評価論文要旨

ドイツ地理教育にみる教授の構造化

- Engelhard の単元「ルール地帯の構造変化」を通して - 大 高 皇*

1. 問題の所在及び研究の方法

地理の授業づくりは入試を意識しているためか、「地名物産の地理」と揶揄される様な、地理的知識を羅列・列挙して詰め込むことに終始する網羅的な地理教授に陥ってしまった、という批判がなされてから入しい。その成果は一過性のもので、地理的知識の定着も不十分である上、地理的知識の理解を深め、その知識を精緻化するような教授が大切にされていない、と言うのである。現在の地理教授ではこうした批判に対処すべく、サンプル・スタディ、窓方式、理論・モデル学習といった様々な教授法が提唱された。だが、これらは結局のところ、いずれも網羅された項目や範囲を整理しただけに過ぎず、前述のような批判に応えるものとは言いがたい。

そこで本研究では、範例的教授学習(Exemplarisches Lehren und Lernen)の 導入を契機とし、羅列的な地理教授の改善に取り組んだドイツの地理教育論に注 目する。範例的教授学習は、教材の過剰によって学習が浅薄に進められることを 防ぐために、基礎的・本質的な教材に制限して、これを一層深く、徹底的に学習 させることを目指して生まれたもので、こうした範例的教授学習は、当時のドイ ツ教授学を席巻し、当然地理においてもこうした方法を取り入れた学習が構想さ れた。ドイツではこれ以降様々な教授論・地理教授論が生まれ、地理教授の改善 が進んだ。

ところで、ドイツの地理教授においても上述の日本の地理教育が抱える問題と 共通する問題が指摘されてきた。これに対処するには地理教授の構造化が求められるのであるが、地理教授・授業を規定する要因は多様であり地理教授の構造化 やその理論化は決して容易ではない。こうした多様な要因を踏まえつつ、事例に 即して具体的に、地理教授を構造化する有効な視点・観点を提示することは地理

[※]社会科教育学

教授論の本質的な課題の一つである。しかし地理教授論は蓄積されてはいるものの、この課題に応える地理教授論は決して多くはない。そうした中、本研究が特に着目するが Engelhard (1997) の地理教授論である。Engelhard は1991年までウェストヴァレンシュタインーウィルヘルム大学の地理学・地理教授学の講座を持ち、以降はミュンスター大学の地理教授学科で、40年に渡り教授計画論の研究をすすめたドイツの地理教授学の第一人者と見なされている。

これまで日本の地理教授の構造化については、上述のように課題として共通理解がなされていたものの、構造化論としての本格的な議論はほとんどない。また、ドイツ社会科教育・地理教育についての紹介は少なからずなされてはいるが、ドイツの地理教授の構造化については取り上げられてこなかった。そこで本研究では、羅列的な地理教授からの脱却に示唆を与えるべく、ドイツ地理教育における地理教授論、特に教授の構造化の理論を取り上げ、Engelhard が構成した教授単元「ルール地帯の構造変化」における教授の構造化の実際を分析しつつ、その特質の一端を解明することを目的とする。本研究はEngelhard の関連文献を中心とした文献研究によっている。

2. 論文の構成

- 序 章 研究の目的と方法
- 第1章 ドイツ地理教授における内容構成原理の歴史的展開
 - 第1節 地誌的アプローチと範例的アプローチ
 - 第2節 系統地理学的アプローチと社会地理学的アプローチ
 - 第3節 学習目標指向アプローチ
 - 第4節 ローカルテーマ的アプローチとローカル・グローバルテーマ的アプローチ
- 第2章 ドイツ地理教育における教授の構造化― Engelhard の理論を中心として―
 - 第1節 教授の前提としての出発状況の分析
 - 第2節 事実分析と教授学的分析
 - 第3節 方法的計画
- 第3章 Engelhard の単元「ルール地帯の構造変化」にみる構造化
 - 第1節 単元「ルール地帯の構造変化」の背景
 - 第2節 単元「ルール地帯の構造変化」の教授の前提
 - 第3節 単元「ルール地帯の構造変化」の事実分析とメディア

第4節 単元「ルール地帯の構造変化」の導入と展開 第4章 単元「ルール地帯の構造変化」に見る教授の構造化の特質 終 章 研究の成果と今後の課題

3. 論文の概要

第1章ではドイツ地理教授計画(Lehrplan:レールプラン)論の発展・再構築の過程とその構成原理の変遷を辿った。ドイツでは独立した教科として地理科が導入されて以降、地誌学習が支配的であった。国々の学習にあたっては、同心円的拡大の順序によって学習が進められて来た。しかし、こうした教授計画は前述の通り羅列的であり、これに替わって「隙間への勇気」(Mut zur Lücke)を標榜する教材制限の動きから生まれた、範例的教授学習原理が地理教育にも取り入れられた。例えば Schultze(1959)は典型的なある地域(または一つの国や州)は、より大きい全体的な地域(国々・連邦、地方)を代表するゆえ、範例となる典型的な地域を徹底的に学習することによる地理教授を提案した。

Rinschede (2005) によれば、その後、特定地域の地域的性格を総合的に研究する地誌学習とは逆に、地表上における個々の事象と地域的差異とその要因について探求する系統地理学習が提唱された。また社会学の影響を受け、農村、都市、犯罪、貧困、教育、環境問題などの社会現象を空間的・地域的に分析する社会地理学の観点を取り入れた地理教授も同時期に提唱されている。

こうした中、「生活状況の克服」に向けたカリキュラム研究を進めた Robinsohn (1967) は、まず子どもたちが成人した際、重要と考えられる実践的生活状況を探し、それを克服するための資質(Qualifikation)を発見し、次にそれに即して先の資質が獲得されるであろうカリキュラム要素を決めてカリキュラムを組み立てる、という学習目標指向の教授計画の構成原理を提唱した。これを受けて学習目標指向の地理教授も提案された。

その後、Birkenhauer (1999) が提唱した、問題設定を政治的・社会的連関から得て、現代世界における紛争分野の地域的次元を理解する「問題地誌」(Problemländerkunde)、特に宗教的・世界観的伝統に基づく、自然要素と文化要素の強い結びつき、独自の精神的社会的秩序、歴史的経過の連関によって地域間の境界を理解する「文化大陸」(Kulturerdteile)、学年段階と地域の結び付けによって、内容の秩序を分かりやすくする「地域的順序」(Regionale Abfolge)とい

ったローカルテーマ的な新しい教授計画の構想が生まれた。現在はこれに加え、 全世界的に事物を考慮するグローバルテーマ的な教授計画や様々な文化的な生活 様式の洞察を通した異文化間教育などが標榜されてきている。

第2章では、Engelhard の地理教授論を中心に教授の構造化論について論じた。 Engelhard は、先行研究の広範な成果を踏まえ、教授を規定する多様な要因とその連関の分析に基づき、教授内容の構造化論、方法計画等、教授計画のための多面的理論を構築している。まず、教授の前提として、学校・クラスに応じた授業づくりのためには学習者と教授者の授業前の状況、出発状況(Ausgangslage)の分析が重要であるとした。この出発状況は、人間学的心理学的前提条件と社会文化的前提条件に分類される。

続いて Engelhard は授業において取り扱う内容の分析と、その取り扱い方法について決定するためには、その内容に対する事実分析(Sachanalyse)と教授学的分析(didaktische Analyse)が必要であるとした。事実分析は、事実構造の解明と、テーマの解明のために不可欠な専門的方法を明らかにする分析であり、そこでは例えば、「自然地理学的構造要素とそれらの中で作用している法則性(物理的な因果関係一生物的な因果関係)そして環境的な影響構造」、「人類地理学的な構造要素」、「環境的な影響構造と社会地理学的な影響構造との間の関係連関(環境一経済、人口、移住など)」、「教科横断的、関係すべき構造要素、連関そして全体連関の中での位置づけ」などの問いが設定される。

教授学的分析は,事実分析の結果を目標にふさわしく構造化し,根拠を明確にして,教授に必要なものへと還元すること(教授学的還元(didaktische Reducktion))である。Birkenhauer や Pollex(1972)の論に基づきながら,教授学的分析の視点として,地理的学習内容の特徴づけのための基準が上げられる。その基準は,地理的学習内容の「構造の理解可能性」,「社会的な関係」,「専門的な代表的性質,問題的な,範例的な,そして方法的な性質」,「人間学的一心理学的,そして状況的な適切性,馴染み易さと証明可能性,検証可能性」である。

そして、学習プロセスの「いかにして」(Wie) に向けられる方法的計画では、授業の資料であるメディア計画、グループ活動などの授業組織計画、そして授業の展開を規定する展開計画の3つの理論について解明した。

第3章では、Engelhard が開発した単元「ルール地帯の構造変化」の事例に即して、教授の構造化の実際について明らかにした。単元「ルール地帯の構造変化」

は、実科学校・中等段階 I の9・10学年の地理の授業として Engelhard が計画したもので、実際はミュンスターのヘルバルト学校の9学年の生徒21名を対象に行われた。当単元は、Engelhard がその地理教授計画論を具現化したもので、その目標、内容、使用するメディア、教授組織、そしてその実践について詳細に述べられている。当単元での学習は、ドイツ最大の重工業地帯で、ドイツの工業国への発展に大きく寄与したルール地帯が、エネルギー転換後、都市空間の再開発や様々な振興政策によって、将来性のある産業分野を抱える地域へと着実に構造転換を図ったことについて進められていく。本章では、その地理学的背景、教授の前提、その目標や内容にかかわる事実分析・教授学的分析と関連するメディア、そして図表を用いた導入と展開について論じた。

第4章では、これまでの論究をまとめる意味で、第2章におけるドイツ地理教育における教授計画論と教授の構造化についての理論的考察を踏まえつつ、第3章で取り上げた単元「ルール地帯の構造変化」の実際を分析した結果と照合して、そこに現れた教授の構造化の特質について指摘した。まず、第一に、教授・授業にかかわる多様な要因とその関係を踏まえて、教授計画が立案されていることである。即ち、ルール地帯の地理学的背景、「ルール地帯の構造変化」というテーマに関わる教師・生徒の人間学的心理学的前提条件と社会文化的前提条件、「ルール地帯の構造変化」という内容の構造(事実構造)、単元の展開にかかわる多種多様なメディア、その目標構造、単元の導入と展開、その教授組織等々がそれぞれ明確な根拠とともに構造的に示されていることである。第三に、目標の層的分析を踏まえて目標が構造化されていることである。第三に、事実分析・構造分析によって、教授の構造化の鍵となる教授内容の構造化が図られていることである。

4. 今後の課題

主要な課題のみを挙げれば、第一は、他の地理教育論を分析して Engelhard の教授計画論を相対化するとともに、ドイツ地理教育論における教授計画論、特に、教授の構造化論の特質を解明することである。第二に、教授の構造化の鍵となる教授内容の構造化とそのための手続きとしての事実分析・教授学的分析についてドイツ教授学におけるその歴史的展開をも踏まえて、その特質と有効性を解明することである。第三に、第1章で取り上げた特定のアプローチ間の移行に着目して、そこに現れた地理教育観、それに基づいた内容構成原理及び教授論を教育学

的背景及び社会・文化的背景をも射程に収めて吟味することである。こうした論 究によって, 地理教育論の根本的本質的問題を, 地理教育論の転換点という典型 的局面で解明できるからである。

5. 主要参考文献

- K.Engelhard(1997) Unterrichtsplanung und -analyse. In H.Haubrich, G.Kirchberg, A.Brucker, K.Engelhard, & D.Richter, *Didaktik der Geographie konkret*. Oldenbourg, pp. 367-430.
- A.Schultze(1959) Das exemplarische Prinzip im Rahmen der didaktischen Prinzipien des Unterrichts. In: *Die Deutsche Schule*. 51.Jg., pp. 492–500.
- S.B.Robinsohn(1967) Bildungsreform als Revision des Curriculums und ein Strukturkonzept für Curriculumsentwicklung. Neuwied.
- J.Birkenhauer(1999) Paradigma, Paradigmenwechsel. In D.Böhn(Eds.) *Didaktik der Geographie Begriff*. Oldenbourg, pp. 115–116.
- W.Pollex(1972) Ein Strukturschema für schulgeographische Inhalte. In Geographische Rundschau, 24, H.12, pp. 484–491.
- G.Rinschede (2005) Entwicklung und Aufbau geographischer Lehrpläne. In G.Rinschede (Eds.) *Geoographiedidaktik*, pp. 113–142.